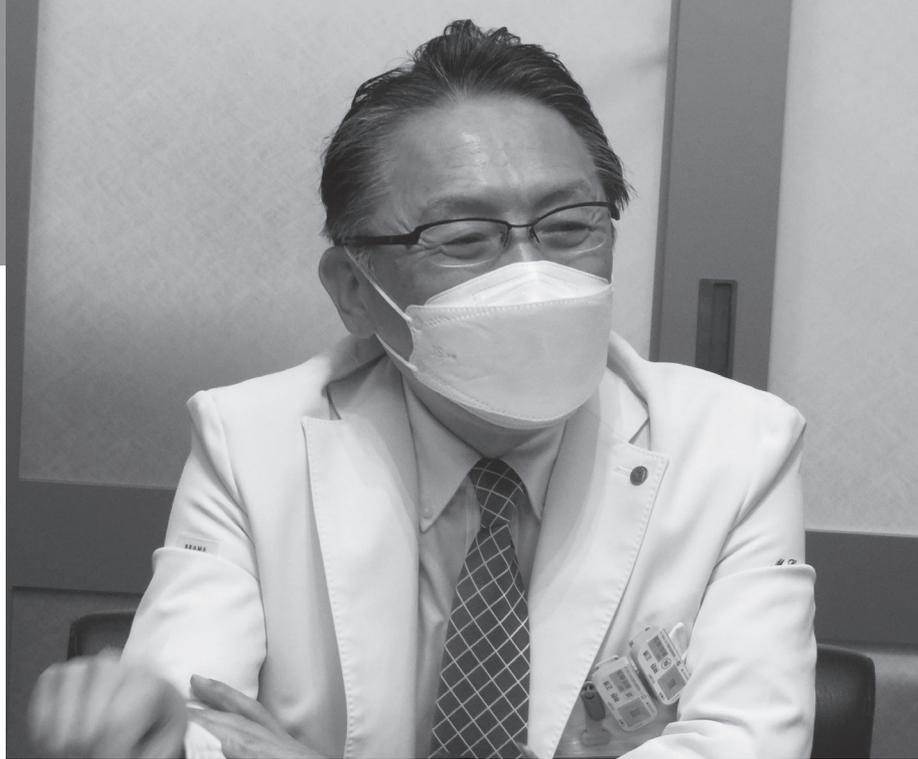


INTERVIEW

社会医療法人財団董仙会恵寿総合病院 理事長
神野正博先生



地域の人の「生きる」を支援する

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

理事長となって経営改善に着手

山田隆司(聞き手) 今日、石川県七尾市の恵寿総合病院理事長の神野正博先生をお訪ねしました。

神野先生には先日地域医療振興協会での病院経営についてレクチャーをしていただきました。また私自身、以前に病院関係の月刊誌の編集委員をご一緒させていただいておりましたので、先生のご活躍ぶりは承知していましたが、そんなご縁があり今回は先生の病院経営の取り組みを、ぜひ「月刊地域医学」の読者の皆さんに紹介したいと思い、直接病院の方へお伺いしました。

神野正博 ようこそお越しくださいました。当院は、現状、医師不足、看護師不足だけではなく、患

者不足でもあります。それだけ人口が減少して、高齢化が進んでいるという地域で、これからどう生きていくのかというのは、私たちにとって大きな課題です。

さて、本題に入る前にまず、私の経歴を少し話したいと思います。

山田 はい、よろしくお願いします。

神野 私は1980年に日本医科大学を卒業して、金沢大学第二外科(消化器外科)に入局しました。1年目は大学にいて、2年目は富山県立中央病院という超急性期で手術に明け暮れました。3年目は大学に戻って、4年目に珠洲市総合病院へ行くことになりました。ここに行くと、実は私

の意識が変わったのですね。それまで消化器外科しかやっていた人間が、内科医数人、外科医3人、産婦人科、整形外科各1人という総合病院に外科医として行って、でも外科以外のことも何でもやらなくてはならない。当直は週1回ありましたし、横に教科書を開いて小外科手術をやったりもしました。それが許されたし、もちろんやったことに対して責任は持たなければいけなかったですし、「どうしてもこれは無理だ」と思ったら、救急車に同乗して七尾や金沢まで行ったという経験をしました。それはあとあと地域医療を考える上で非常によい経験だったと思っています。

山田 珠洲市総合病院は地域の唯一の公立病院ですね。何年ぐらいそこにいらしたのですか。

神野 たった1年です。そこではへき地診療所に週1回、出張診療にも行っていました。

ほんの1年だけでしたが、へき地医療に従事する先生方の気持ちが分かった気がしました。

その後はずっと金沢大学でバリバリの消化器外科医として、臨床に加えて実験をしたり、論文を書いたり、学会発表をしたりしました。日本癌学会の学術総会で、癌の転移のメカニズムというような内容で発表したら、「癌の転移のメカニズム判明！」と、読売新聞の全国版に載ったこともありました(笑)。「嘘つけ」ですよ(笑)。

そして、1992年、医師になって12年目にこの病院に来ました。ここは祖父が作った病院で私は3代目になります。最初は外科科長として戻ってきて、1年後に病院長になり、その1年半後に理事長になりました。

山田 帰ってこられたときは、お父さまが理事長

だったのですか。

神野 そうです。父が理事長兼病院長でした。だから帰ってきて私も外科医として若い医師と一緒にやっていたのですね、ところが、病院長になり、理事長になったら、銀行の担当者が来て、「今の経営状態をどうするのですか？このままでは職員のボーナスが出せませんよ」と言われ、ハッとしました。実は拡大戦略でかなり投資をしていたので、借入金が大きかったのですね。

山田 それは銀行も必死ですね。

神野 はい。それで何とかしなければいけないと思ったのですが、考えてみたら自分は病院長ですが、ほとんどのドクターも事務長も、スタッフたちも私より年上なのですね。この人たちに自分の思いを告げるときに、経験則からしても同じ土俵に立ったら駄目だと思い、当時、コンピュータというものがようやく出てきた頃で、ニューフロンティアはICTだというので、そちらを推し進めることにしました。若いドクター何人か、私よりも得意な人たちもいたので、その人たちにも協力してもらいました。

そこでまず、医材の仕入れの効率化を図れば少し赤字が解消するのではないかと考えて、いろいろチャレンジを始め、最終的に1994年にSPD(Supply Processing and Distribution)、病院が使用する医薬品などの医療消耗品の供給・在庫・加工などの物流の一元管理を導入しました。つまり物品にバーコードをつけて管理するスーパーマーケットと同じシステムですね。それを病院で初めて導入しました。

山田 今では当たり前のことになっていますが、先生の病院が最初だったのですね。